●今月の表紙●
angler：——
field：——
photo：——
layout：本誌・里

へら鮒

Monthly fishing magazine herabuna Contents

「へら鮒」の題字/叶 九隻

No.469
Jan.2005
1

管理釣り場割引クーポン券が今号から付きます！ 163ページ～

野田幸手園、椎の木湖、清遊湖、谷和原大沼、隼人大池、上尾園、F.A吉羽園、谷養魚場、将監、柳生FP、筑波白水湖、泉堰

超豪華賞品が大集合。商品組数66組！ 総当選者数153名！
8 **40周年記念特大プレゼント**

壮絶なドラマを展開。初制覇・天笠 充の独占インタビュー付き！
16 **ダイワスーパーバトルカップ2004**

基本を見直し、ステップアップ！
26 セット釣りシーズンin特別企画 **石井旭舟のセット釣り指南**

COLOR（カラー）

33 棚網 久 **あなたの夢を叶えます。**
「私を無敵にして下さい♡」
ゲスト:村田雅美さん 釣り場:鬼怒川大自然

38 **第26回 G杯争奪全日本へラブナ釣り選手権**

40 **第10回 ダン・へら名人クラブ対抗ペアへら鮒釣大会**

41 戦い続ける男、浅草へら鮒会、年間タイトルへの挑戦。**小池忠教 激闘の軌跡**
《第10戦》11月例会:横利根川

46 名手・石井旭舟がいく、へら鮒出会い旅… **へらぶな浪漫街道**
《第二十四回》愛知県 ひだ池

52 **杉山達也のSPLASH BEAT Ⅲ**
《Vol.8》真嶋園で両グル炸裂!!

★AREA REPORT
59,69 平尾池（奈良県） 前田誠志
60,66 宮沢湖（埼玉県飯能市） 本誌・伊藤洋一
62,70 本庄池（福岡県） 河口正伸

64 **竿春会4会合同懇親会**

134 **竹とともに生きる。**
《第17回》「竿春」作者 阪部 博

139 戸張 誠 **野釣り道場**
《第八回》【三島湖 夢の島対岸の底釣り】

145 田辺哲男の**「それってどーゆーことよ!?」**
《Vol.24》羽生吉沼、気難しい旧べらを釣りきる
小林恭之の【ホワイトホール両グル】!!

150 吉川ひとみの**「へらってヤバイわっ!!」**
《Vol.30》ひとピー、吉羽園の怪物くんを独り占め!

155 チョーチン王・田中雅司の深宙奥義伝承 **魚心掌握**
Vol.4【雅司に訊け! ～基礎を固める～】

194 岡田 清 **Deep Side Angle**
《Vol.15》【セット釣り、新たなるステージを目指して。】清遊湖

200 **冬季特別付録 岡田 清のウドン作りを大公開!!**

202 新連載 稲毛師匠と編集部諸が行く、**ODEKO危険度120%**
《第1回》鬼怒川宮岡橋上流の水路（栃木県宇都宮市）

206 **釣りクラブ見参 TEAM NAKAJIMA**

208 **フィッシングレディ**
《今月のレディ》竹内里美さん 富里乃堰（千葉県）

MONOCHROME（モノクロ）

★AREA REPORT
67 山本潟（石川県） 山本一朗
68 三川フィッシュパーク（岐阜県） 後藤 誠

71 **第8回 椎の木湖フレンドシップ選手権**
72 **木村商店主催 「心道」と釣ろう会」を開催**
73 **松岡釣具主催 "名人に聞くへら釣りQ&A"を開催**
74 **忠相モニター懇親会**
76 **かわせみ 竹竿クラブ「水凪」秋の大会**

78 新連載 **へら鮒釣り 超基本講座**
《第1回》綺麗な仕掛けを作ろう

83 新連載 あらいしのぶの **なぜなぜ しのちゃん**
《第1回》「しのちゃん、傷心旅行!?」川越FC 教授:ミスターG・棚網 久

88 トーナメンター小林恭之が挑む! **竿頭までぶっ飛ばせ!!**
《第13回》G杯争奪全日本へラブナ釣り選手権（筑波湖）

92 **NHCスピリット**
《Vol.16》NHCへらぶなトーナメント関東シリーズ第6戦 清遊湖 青木政幸

99 **江成公隆のトーナメンター、復活への道。**
《Vol.31》底釣りゼミ2005 PARTゼロ!?

108 **そんなモジリにダマされて…** 天野正由
《その13》やっぱ田貫湖じゃん!（宮沢湖～田貫湖）

114 **水辺のプラネタリウム** 吉本亜土
《今月の星空》「後悔日誌」

117 新連載 **どやさー 今月の釣り場** 西田美明
《その1》「野釣り加古川&分川池」二題

122 **最狂へラ戦士養成所"鮒の穴"** 漢タカハシ
《第二十三話》【0.8ブツブツ事件発生! 怪しい臭いブンブンの堰へビューイゴー!!】

126 **野田幸手園新聞**

161 **ワクワク管理釣り場情報**

168 **小売店情報**

★へら鮒BOX
175 里ちゃんの新米編集長雑記
176 情報発信基地
178 ボイス
184 コラム『夢中と書いて夢の中』 伝道師P
185 『日研だより』 日研広報部長・遠藤克己
186 『へら狂おやじと呼ばないで』 白石和弘
187 『紀州"想いの竹"のものがたり』 中峯伸行
188 釣果予想クイズ
190 プレゼント発表
191 広告索引
192 編集後記

※【釣りの帰りに寄りたいお店】【へらアイテムメッタ斬り！】は、ページの都合により今月はお休みさせて頂きます。ご了承ください。

STAFF

●Producer
根本百合子

●Editor in chief
田中里史

●Editor
大場勝良
諸冨一秋
伊藤小百合
伊藤洋一

●Planner
〈オフィス・えふ〉
藤原 肇

40th Anniversary Year

この物語は、
栄光、そして挫折を味わい、
今、再び這い上がろうとする一人の男の人間ドラマである。

江成公隆のトーナメンター、復活への道。

〈Vol.31〉

底釣りゼミ2005 PARTゼロ!?

「一歩進んで二歩下がる!?」

text and photo by Kimitaka Enari and Satoshi Tanaka
業界初、Web連動企画！ 《URL》http://hesar.yokohamatsurumi.net

まず最初にぶっちゃけておくが、「底釣りゼミ2005」というタイトルに期待してしまったみなさんには、お詫びしたい。なぜなら、例によって今月号は、エナリ節炸裂の長〜い「前フリ」だけだからである（だから「PARTゼロ」なんです）。10月24日、里はG杯全国大会に参戦した。舞台は筑波湖。4年連続の予選突破である（カックいー！）のだが、全国大会では惨敗続き。今年は前日試釣で底釣りがバクバクで、本戦一回戦もバクバク。「こりゃ今年は優勝か!?」と本気で舞い上がったが、二回戦でおもいっきりコケた（ものすごくおもいっきり）。詳しくは本文を読んでみて欲しいが、はっきりいって悔しかったし、すごく情けなかった。と、そこで気付いた。「筑波湖で、江成アニキに北城理論で釣ってみてもらおう！　ヤツならきっと釣るはず。それを今月の取材にしよう！」と。そして、最近の「ペレ底ブーム」を江成流に分析してもらっても面白いかな…とも考えていた。
11月3日、里とアニキは筑波湖にやってきた。当日は「新潟ホリデー」の筑波湖例会で、里の師匠であるマルキューフィールドテスター小柳康秀氏もいる。そこで氏に協力を仰ぎ、江成と3人で底釣り徹底研究！…のはずであった。
しかし…

by里ちん

先月号の里ちんの僕に対するコメントには、かなりグッとくるものがあった。「ちょっと持ち上げ過ぎじゃないか?」とは感じたが、正直、嬉しかった。ただ残念な事に、僕はやはり「タダ者」だった。先日、里ちんと一緒に便乗参加した新潟ホリデーの例会で、僕は思い知らされたのだった…。

10月末の新潟県中越地震。僕はお祭り騒ぎの最中で、最初は酔いが回ったのかと思っていた。見上げれば揺れる電線があり地震だとは気付いたが、たいして気にもとめなかった。大きくなかった神奈川の震度。だがしかし、その時生死を彷徨っていた人々もいたのだと思うと、大騒ぎしていた自分が恥ずかしくなってくる…。とはいえ僕が現地に赴いて何かをするわけでもなく、いつもと変わらぬ毎日をただ過ごすだけである。反省ならぬ、同情だけなら猿でも出来るのだが、こんな自分は嫌な人間なのだろうか。

「同情するなら金をくれ」という安達祐実の名セリフを思い出した。一度思い出してからというもの、まるで脅迫観念にとり憑かれたかのように頭の中で何度も何度もリフレインした。仕方なくというわけではないのだけれど、僕は慌てて募金をしに行った。「助け合い」の精神は大事だが、労働力を提供出来ないならば、お金を出すしか方法はない。何でも金で解決しようとする姿勢に疑問を感じるケースは多々あるが、現実として毎日の生活を放棄する事は不可能だ。仮に現地へ行くことが出来たとしても、足手まといになる可能性があるし、物資を送ったとしても、それが現場で本当に必要とされているモノなのかは分からない。「お金」が一番無難かつ重要なものなのかもしれない。とりあえず、小額の募金を済ませた僕の頭の中から安達祐実は消えた。僕の中の偽善は満足してくれたようだ。実際、「塵も積もれば…」ではある。

関東地方に住む僕にとって、地震は「他人事」ではない。「来る来る」といって来ない東海地震に怯え「地震保険に入ろうかどうしようか？　だが、そんなお金があるのか?」と日々悩んでいるし、僕の誕生日が防災の日（関東大震災が起きた日）であることもあり、地震に対する関心は自分では低くないと思っている。ただ今回の募金はそういう関心からではなく、「人として」今回の地震での被災者に対し、心からお見舞いしたいという感情が沸き起こったのだ。これには自分でもビックリで、正直な話、阪神大震災の時にはそこまで自分の感情に変化はなかったように思う（募金はしたと思うけど）。

これはなぜかと考えてみると、自分が親になったというのがまず大きな要素だろう。「もし自分の家族が犠牲になっていたら」という視点が、阪神大震災の時には欠落していたように感じる。当時、独身の自分にとっても親という家族がいたのだが…要は僕が今以上にコドモだったということだ。次の要素としては、今回の地震での詐欺事件の多さが挙げられる。募金詐欺に始まり、オレオレ詐欺…。火事場泥棒とはよく言ったものだが、善意につけ込んだ募金詐欺は特に許しがたい犯罪である。ここで「許せん！」と力んではみたものの、募金をしていない自分にハッと気付いて慌てた人は多いのではないだろうか。僕もその一人である。もうひとつの要素として最後に挙げるのは、「新潟に知り合いがいる」という事実だろう。大学に行かず地元の高校が最終学歴であり、なおかつ仕事も地元で就いていて、生まれ育った京浜地帯からほとんど出ていないような僕になぜ、そんな知人がいるのかと言えば、ズバリ「釣りのおかげ」である。「趣味」には、地域や年令、職種を超え

た幅広い交友関係を育む力があると、僕は思っている。例えば近所の川にしか釣りに行かない人がいて、そんなに幅広い交流は無理だと思うかもしれない。でもそこに行けば、昔からの親しい友人や家族、職場の同僚達とは違った世界が必ずある。なにも全国に友人がいなければいけないという話ではないので、スケールの大小は関係ない。そのタイミングそのタイミングで、自分の幅を広げる勉強のチャンスはあるのだ。

新潟在住のマルキューフィールドテスター小柳康秀氏のホームページの掲示板を覗きにいったのは、地震発生から数日経ってからの事だった。氏はG杯全国大会に出場のため、その前日にあたる23日の地震発生時はおそらく関東にいただろう事は推測できた。が、氏本人からの書き込みが全くない事が気掛かりだったのだ。

新潟ホリデー。

長岡市に実家がある里ちんから電話がかかってきた。次の取材場所は筑波湖であるというが、そんな事より実家は大丈夫なのか?

「家はビビ入ったらしいすけど、家族はみな無事みたいでホッとしました…」

ノーテンキなこの男であっても、G杯決勝は集中出来なかったろう。すぐにでも実家へ飛んで帰りたかっただろうが、編集長という立場の彼にとって休暇はゼロに等しい。つとめて明るく振る舞っているのは痛いほど伝わって来た。

「ところで、当日は新潟ホリデーに便乗していただくって恰好になりますんでヨロシクです!」

「何? 新潟? 地震はどうした、地震は? 小柳さんは?」

「だいたい新潟市の人達なんで、地震の影響はほとんどないんですよ。小柳さんも無事ですよ(笑)」

ちなみに、小柳氏と里ちんの付き合いは古く、里ちんにとっては基本を教わった釣りの師匠であるらしい。ただ、僕は小柳氏の住まいが新潟県の何市にあるかまでは知らなかったのだ。

取材当日の朝、挨拶もそこそこに事務所前でのしばしの談笑。僕は地震に関心があったが、小柳氏と里ちんはG杯の話しかしない。そして突然、筑波湖の話題になったかと思うと、またG杯の話に戻ってしまう。地震へ話題をすり替えようとチャンスを窺い始めたその時、僕はようやく二人の話の展開を理解する事が出来た。G杯の決勝は、筑波湖で行われていたのだ。予選落ちの僕にとっては、決勝をどこでやろうと知ったこっちゃなかったのだった。

「で、アニキ! 今日のテーマはもちろん底釣りですんで…」

「もちろんって何だよ…」

「G杯決勝は今流行りの長ッパリスのベレ底対決だったんですが、優勝した岩佐さんの底釣りは、アタリのタイミングが底に着くかどうかという今風のパターンではなくて、どちらかと言えばじっくり系だったんですね。返してツンみたいな。で、僕もマネしてみたんですけど乗らないんですよ~! 二回戦はスレまくりで…。エサもあるとは思いますが、見事に全カラスレ…。今までの僕だと、完全底釣りでの長いハリスにはいいイメージがないんですね。でもヤラレちゃったわけで、これは何かあるぞ、と。で、アニキの力を借りたいと思ったわけです。史上最強の北城理論にアニキ流の考察を加えていただけたらな、と。小柳さんも一緒に検証に付き合ってくれるんで、今日は一日お願いしますネ♡」

トーナメント参戦というテーマにこだわり、先月号で強引に軌道修正されたのは一体何だったのだろう。先月は原稿を落としてしまったので偉そうな事は言えないが、里ちんの頭の中こそ理解不能だ。予選も通れないような自分が決勝の釣りを論ずるなどとんでもない話だというのに…。

何となく地震の話はタブーという空気を、僕は釣りをしながら感じていた。もし勘違いではないとしたら、それは彼等が感じている後ろめたさのせいかもしれない。「同じ新潟のよその市では、多くの被災者がもがき苦しんでいる。そんな時に、釣りなどしていていいのか?」きっとそういう苦悩だろう。そんな事をボンヤリと考えながら竿を振っていた時、誰かがついに地震の話を切り出した。

「こんな所で釣りなんかしてる場合なのォ?」

もちろん本気ではなく冗談ぽい言葉ではあったが、それでも直球過ぎるのでは?と、僕は驚いた。もっともこのセリフでは、自分に対して心配してくれているのか、それとも他人に対する心配をしろという事なのかはハッキリしていないのだが、注目のリアクションは「すみません…」というマジ台詞だった。

ここで僕は考えた。同じ新潟の人間だから現場に駆けつけなくてはならないのだとしたら、僕も同じ日本人として駆けつけなければならないという事になってくる。大事なのはどこで線を引くのかという問題ではなく、気持ちの問題ではないのか。与えられた立場の中で、自分に出来うる最大限の事をすればいい。被災地ではないとしても同じ新潟県人の彼等には、僕よりはるかに多い新潟県人の知り合いがいる。そしてその知り合いの中には、おそらく被災地に住む人もいるだろう。楽しそうに竿を振っているように見えて、内面では僕の想像も及ばない深い悲しみにくれているかもしれない。

そんな彼等から明日へのエネルギーになるかもしれないへら釣りを取り上げることなど、誰にも出来ないと思う。

欲張り。

3号桟橋中央付近。奥から小柳氏と僕と里ちんと並んで座り、全員21尺の底釣り。僕以外の2人は長ハリスの底釣りで、小柳氏は着底した瞬間の早いアタリをメインに狙う。里ちんは自身のテーマである、長ハリスでの完全底釣り。僕は35—42㎝という短め、というかオーソドックスなセッティングで、やはり完全底釣り。これで違いを見てみることになったが、竿を並べてしまったせいか3人ともパッとしなかった。それでも3人は底釣りについて真剣に?語り合い、取材は僕としては一応カタチになった(つもり)*。ならばということで、午後からは沖打ちのバラグルをやってみる事にした。この時点でバラグル組は、不調の底釣り組を尻目にグングン調子を上げており、例会で勝負が懸かっている小柳氏もそわそわしていたのだ。呆れる里ちんをよそに、僕と小柳氏はせっせと宙釣りの準備を始めた。

2人は共に21尺のままでウキとハリスだけを交換して3本半位の宙にしたが、1投目からウキは動いた。へらはやはり上にいたのだ。僕は高い位置でのサワリに激しく興奮し、「新べらならこんな動きでもくわえてるんだぜ~!」と、調子に乗ってアワせまくるが全く乗ってこない。そんなにアマくはないようだ。そのうちアタリも消え、完全にウワズラせてしまったと思った僕は、思いきって2本まで上げてみた。が、全く気配がない…。ここでふと小柳氏のウキを見る。と、いい感じでサワりながらどっぷりとナジみ切り、ワンテンポ置いてズルッと消え、どデカい新べらが乗った。おそらくグルテンは落下中だったろう。氏のタナは3本半のまま。僕も慌てて戻した。イケイケの釣りを勝手にイメージしてチョ

マルキューフィールドテスター小柳康秀氏。氏とは里が学生時代からの付き合いで、へら鮒釣りの基本を叩き込んでくれた師匠でもある。いつも明るく、頼れる兄貴的存在。釣りの腕も超一級品だ。ちなみに、かなりマニアックな話だが、その昔、本誌「まるビあっちゃんのケチケチ釣行記」や「ビンジョー物語」に出ていた「新潟の釣友O君」とは、氏のことである…。 by里ちん

江成、げきちんー

小柳氏、バラグルで大型ラッシュ!

イスしていたムクトップ。エサが重すぎるせいもあったが、深ナジミに耐えられず沈没という事態が頻発していた。僕はウキの交換が面倒臭いという理由から小エサでごまかしていたのだが、そのせいかキチンと寄りを保つことが出来ないようだった。

「江成さん、こういう釣りの時はいつもムクなの?」

氏に言われる前に交換しておけばよかったと後悔。氏はいまや、マルキューが誇る精鋭集団「フィールドテスター」の一員である。そんな腕達者の隣で釣りをしているのだと、ここであらためて認識し、僕は一気に緊張していった…。

パイプトップに換える時、ハリス段差についても氏から質問があった。

「江成さんはいつもそういうセッティングなの?」

この時、僕は40—70㎝。氏は20—80㎝。今振り返ると、この時の氏の質問には深い意味はなかったような気がするが、完全に舞い上がり始めていた僕にとっては、全てを見透かされているような気持ちになってしまっていたのだ。

「うーん、いつもって言われても、こういう釣り自体が何年ぶりかなって感じなんで…。正月の三島なんかでやる深宙のバラグルでは、小柳さんのセッティングに近いですかねぇ…」

「う〜ん…」

ヤバい。もしかするとこれは呆れられているのかもしれない。そう感じた僕は、慌てて氏と同じ20—80㎝へと変更した。わざわざハリを結んでまで変更したこのセッティングが、結果的に僕を地獄に突き落とす事になるとは知らずに…。

僕のパイプトップは毎回キッチリとナジみ、そして止まる。沈没は免れた。しかし肝心のアタリが出ない。だが間違いなく魚はいる事は、僕の自作ウキでもはっきりと伝えてくれている。一体なぜなんだろう…。隣で完全に地合を作られてしまうと、へらを根こそぎ持っていかれるというケースがあると僕は感じているが、今回もそうなのだろうか。

確かに隣の小柳氏は見事な地合を作り出してはいた。でもその前に、自分の釣りが全くお話になっていないような気もしていた(へら釣りは残酷である。間違ってもビギナーには釣れないケースがあるからだ。しかしそんなケースであっても地合につながる接点を見つけられれば、隣はオデコで自分はイレパクという状態になる。病み付きになる快感。こんな僕でも、遙か以前にはたまに味わえたのだが…)。

「江成さん、グルテン付いてないんじゃない?」

きっちりナジミを示し、へらのサワリも出ているウキ。にも関わらず決めが出ないことを受けたなら、最初に疑うべき基本中の基本。「アタらない」ではなく「アタれない」のではないか、と。しかし僕はバラケのナジミに惑わされ、肝心のグルテンがハリ抜けしている事に全く気づけていなかった。恥ずかしいというより、正直、かなりヘコんだ。「月イチではそんなもの」と開き直ることが出来ず、「気づけて良かった」とも素直に喜べなかった。

「江成さん、グルテン何使ってるの?」

「α21単品」

「うーん。それで持たないって事は、持ち過ぎでアオられちゃってるんじゃないですか?」

「…いや、去年か一昨年に開封したやつなんで、もしかするとそれが原因かも」

それから氏はしばらく黙ってしまった。呆れたというより、怒ったと言った方がいいかもしれない。真面目な氏に不愉快な思いをさせてしまったことを、この場を借りてお詫びしておきたい。

里ちんから開封したばかりのグル魂を奪い、気を取り直して再開。しばらくの中断でへらが減ったせいもあるが、明らかに中断前よりナジミが深い。グルテンの分だ。そして数投もしない内にアタリが出始めたが、アタるタイミングが遅い。サワリとアタリが連動せず、バラケが抜け切ってからしばらく待たないと落とさないのだ。時間の経過と共にだんだん早まっていくだろうと気楽に構えていたが、そうはならなかった。今度は何なんだ…。

「江成さん、バラケはどんな感じですか?」

「底釣りのダンゴを水で戻して適当に粉を入れた感じで…すんません。呆れちゃいました?僕ってこんなレベルなんですよ…」

「いやいや呆れてなんかいませんよ(笑)。ただ江成さんは欲張りなんだなぁって思って」

「欲張り?」

「ええ。だってそういうエサの使い方って凄く難しいじゃないですか。普通の人はそこまで追いかけないで、ある程度の所で諦めるわけですよ、悪く言えば。でも江成さんはそうはしないで、あえて難しいと承知で突き進んでいく訳ですから(笑)、楽しみを途中で放棄したくないって事でしょう?」

「とんでもないですよ。そんなんじゃないんですって。ただめんどくさいのと、もったいないのと(笑)、今風のブレンドも知らないからですよ。っていうかエサもほとんどバッグに入ってないですもん。」

「アハハ…。まぁ、ある程度の自信がなければ出来ない事でしょうからね。でもハッキリ言いますけど、昔と今は違いますよ、江成さん」

「はぁ…」

この後、氏は僕を立て、一からの作り直しではなく手直しという方法でアドバイスをくれた。それは、底釣り用のダンゴがベースという致命的な欠点を補うため、大量の【粒戦】(だっけ? 里ちん?)を投入して開きを促進させようというもの。直下にこぼれ落ちるペレットの粒が、離れた下バリのグルテンへと誘導する。なるほど、合理的だ。今までの自分のバラケでは、グルテンと連動していなか

ったがためにアタリが遅かったと推測できるのだ。

さっそく手直し、と行きたいところだったが、大量と言ってもどのくらい入れればいいのだろう？　【粒戦】をあらかじめ水で溶くとは聞いたが、どの位の水量比率なのか？小柳氏に聞こうと思ったその時、僕のエサボウルに大きな愛の指、いや手が差し伸べられた。ホリデーにゲストとして招待されていた、マルキューチーフインストラクターの横山天水氏だった（でも天水さん、僕には振り込めませんよ、コレ…）。緊張の中、何とか落とさないようにエサを打つ。激アマと呼ぶには硬いバラケではあったが、数年ぶりの21尺での沖打ちでは痺れるものがあり、納竿まで釣りというより竿振りの練習になってしまった。が、それがイマの僕なのだ。

帰りの車中、身の程を思い知らされゲンナリしながらハンドルを握っていた。

「月イチで2つの開きはコントロール出来ねーよなァ…。長竿なんかもう振らねー！」

だが本当に自分の知っている知識だけでは正解に辿り着けなかったのかどうか、もう一度考えてみる事にした。というのも、午後からは何だか自分で釣りをしていた気がしなかったからだ。その感覚はバラケを手直ししてもらう遥か以前から存在していたので、自分のした事を順に振り返ってみる。

●【3本半から2本へ、そしてまた3本半へ】これは納得。というか反省。

●【ムクからパイプへ】これも納得。

●【40—70㎝から20—80㎝へ】…これだ！

ここで僕の思考は切れてしまっていたのだ。開きの乏しい僕のバラケにとっては40㎝のハリスで振らせ、バラケを促進させる必要があった筈だ。その程度ではバラケが促進されなかったとしても、滞空時間をかせぐ事で不足した粒子のアピールを補えたかもしれない。さらに固形セット的に見れば、締まったバラケでグルテンに連動させるには、下バリに近い位置にバラケを置かなければならなかった。…しかし僕は、上下共に開くエサを使用する場合、固形のセットほどにはエサどうしの距離感はシビアではないと考えている。なぜなら、ちょっと強引だが開くどちらかのエサ一方を一組のバラケとクワセ（そのエサの芯）と見立てれば、そのエサを食う瞬間に距離はゼロということになってしまうからだ。バラグルの釣りはセットというよりダンゴに近いのではないか。そのためハリスに求める意味には、追わせ方やアタらせるタイミングなどの釣り人側の都合の割合が、固形セットに比べれば大きい。実際に今回の2人のセッティングを見ても、上下のハリスがナジミ切った状態と水平方向に開いた状態とでは、段差に違いが有り過ぎる事から、ある意味アバウトだと理解していただけると思う。もし僕の下ハリスが小柳氏より10㎝短いためにへらまで届かないのでは？と思う方がいるとしたら、実は僕のセッティングの方が水平方向最大で離れる距離が大きいという点に着目して欲しい。また、「追い」という要素を突き詰めて考えてみた場合、上ハリスが伸びれば下ハリスを詰められるという理論もある。これは僕が多大な影響を受け、今も尊敬する石坂和彦氏の理論であり、いずれあらためて紹介したいと勝手に決めている。

…と、釣りの後のラーメン屋では里ちんに愚図り倒していた僕だったが、パーキングでの仮眠にも手伝われ、真夜中の首都高上で急速に調子を取り戻しつつあった。だが、後の祭りである。カッパギは戻って来ない**。

そんな事より何より、無謀にも現役フィールドテスターにカッパギを挑んだこと自体が恥ずかしくてたまらなくなった。午後からの僕のバラグルの釣果は、結局たったの1枚だった。里ちんはこんな僕のことを、「タダ者ではない」などと先月号で書いてしまっているのである。

【里ちん註】*読者の皆様ゴメンナサイ！　カタチになった筈の底釣り取材ですが、今回の原稿には全く出てきません。おんどりゃ〜！！　…次号に乞う御期待！　**実はカッパギをとったのは里ちんなのだ！　2人が宙に変えた後、底を一人占めしたらバックバク！　漁夫の利とはまさにこの事ですな、ガッハハハ〜！

新年号ということで。

12月の頭にこの本を手にする読者の方にはまだ早い気もするが、一応新年号ということで今年一年を振り返ってみたい。まず最初に思うのは、例年通りに「今年もあっという間に終わりそうだ」ということ。事実、僕の今年最後になるであろう釣りは、取材の筑波湖ですでに終えてしまっている。時間の経つのは本当に早い。齢をとる度に加速していると感じ、10年、20年後はいったいどうなってしまうのかと心配になるほどだが、内容的にはやはり「今年も幸せな一年だったな」と心から思える。夫婦間の衝突以外に大きな問題はなかったし*、家族全員大きなケガもなく健康でいられた。「これで十分」と思わなくては罰が当たるというものだ。

「ケガもなく健康なら幸せ」。実はこれは「汗水流して働く尊さ」と共に、社会システムによって刷り込まれた価値観でもある。その他大勢の一般人達が「質素でも健康」、「低賃金でもやりがい」に「幸せ」を感じてくれなければ、資本家（≒投資家）達が困るからだ。たまに勘違いしている人がいるが、民主主義（≒自由主義）と資本主義とは全く意味が違う。日本は確かに北の某国のように自由がほとんどないわけではないし、本当のところは分からないけれど、とりあえず皆好き勝手な事が出来ているように見える。しかし日本は資本主義。資本、つまりお金がなければ何も出来ない残酷な一面もある国なのである。では一般人には全くノーチャンスかと言えば、実はそうでもない。何人にも公平にチャンスがあるように見えてはいるし、チャンスを広げる可能性に賭け高い学歴を身に付け（させ）ようとする者も後を絶たない。だが、その学歴をどう使うかが問題で、一流企業に入社したところでピラミッドを登り詰められるのはほんの一握りだし、社長になれたとしても結局、一個人として資本家にはそうそうなれない。だから本気で資本家へ転身したい者は、組織の内部からは攻めない。組織に属するとしたら、資金作りやノウハウ吸収を目的とした短い期間のことだろう。

ここで、僕が自身のアイデアを売って資本家から資金を引き出し、事業を興して軌道に乗ったと仮定してみる。さらに、多忙すぎて休みはほとんどないが、所得は年々増えているので嬉しい悲鳴と納得しているとする。商売繁盛、順風満帆。普通ならこれ以上は何も望まないだろう。だがここで満足してしまっていては、ただの金持ちであって資本家ではない。自らが作り上げたビジネスを他人に委ねることが出来て初めて資本家の仲間入りを果たせた事になるからだ。ちなみに、自分で汗をかかなくても生活出来る身分になることが僕の考える資本家であるので、収入のスケールは関係ない。贅沢は出来ない、というレベルであっても、あるビジネスのオーナーであれば、それは十分資本家ということになる。

資本家にはならずに、ただの金持ちで終わるのも悪くない。価値観は人それぞれだから、ゴールをどこに設定しようが全くの自由だし、僕にとってはどちらも素晴らしく映る。だが資金作りから始めなければならない一般人にとっては、借りるにせよ貯めるにせよ、どちらも困難な道程には違いない。費やす時間も

労力もハンパではない筈で、もし資金があったとしても、会社勤めとの二足の草鞋でこなせる自信は僕にはない。だからと言って、現在の職を捨てるわけにはもちろんいかない。

冒険には常にリスクが伴う。今以上に背負えるキャパがほとんどない僕にとっては、リターンよりもリスクに目がいく。大きな賭けには出られない。リスクが低い勝負でなければ困るのだ。そして出来ればノーリスクがいい…。だが、そんなウマい話は探しても待ってもある筈はなく、僕に出来ることと言ったら、せいぜい宝くじが当たる事を祈るくらいだ。初詣の祈願では、ここ何年も家族の健康と宝くじの二本立てである（あ！喋っちゃったら御利益が…）。

2005年は「へら鮒」が創刊40周年を迎えるそうな。一獲千金を夢見、または一国一城の主にならんとして事業を興す者は、毎年数千にも及ぶ。そして消えゆく企業もまた数千に及ぶ中、40年という歴史は重い。先代社長の経営努力の賜物であろう。ただ純粋にこの釣りが好きというだけで創刊してしまった先代だが、釣りブームもあったとはいえ趣味の雑誌の経営は楽ではなかったに違いない。

努力と言えば、僕の友人である岡田 清氏と萩野孝之氏の話をしてみたい。

先月号で里ちんが「僕の同期云々」というコメントをしていたが、真っ先に思い浮かぶのはこの両人である。彼らをつかまえて悔しいもへったくれもないのだが、僕ももう少し釣りに行きたいという気持ちは、正直に言えばある。と、こんな書き方をすると彼等が釣りばっかりやっているという誤解を招くかもしれないが、すでに誤解している人は多いと思うのでまぁいいか。友人として補足すると、「彼等は釣りばっかりはやっていない。しかし普通の人よりはやっている。もちろん仕事もキチンとやっている」

となる。特に誤解を受けやすいのは萩ちゃんだ。彼の場合は釣りが仕事と言っても差し支えないかもしれないからだ。厳密に言えばウキを作ることが仕事だが、ウキのテストは当然必要だし、立場上の様々な付き合いや取材もあって釣行は多いだろう。それでも釣りに行けるだけで羨ましいと思う人もいるかもしれない。だが冷静に考えてみれば、釣りに行けば行くだけ彼の収入は減るのだ。「どうしようもない二日酔いで出社しても、仕事するフリをしてどうにかこうにか定時まで漕ぎ着ければ給料が貰える」という訳にはいかない厳しい世界に彼は生きている。岡田君も自営業という部分では同じ。彼が店に立たなければ売り上げは入って来ないのだ。岡田君にとって、釣りに行く日が必ずしもイコール休日ではない。お分かり頂けるだろうか。彼は寝ていない。まるでナポレオンだが、二人とも釣りが出来る環境を必死に作っている。組織に甘えてブラさがっているような僕には、到底真似出来ない。

筑波湖の帰りに寄ったラーメン屋で、僕は里ちんに連載打ち切りを切り出した。小柳氏にコテンパンにやられたからではなく、釣りに対する自分の姿勢に疑問を感じてしまったからだ。天笠氏との対談では「自然体で良し」という結論になり、自分でも納得していたが、現在の僕の「自然体」では取材やイベントがなければ全く釣りに行かないということになってしまう。「へら鮒」が届くと自分のページをチェックするが、毎月毎月その釣りが僕の直近の（最新の）釣りなのだ。

もちろん僕はこの釣りが大好きだし、竿を握れば夢中でやる。しかし今の僕は、「何としてでも行こう」という気にはなれない。要は僕の中での釣りの優先順位が低いのだ。そんな人間に専門誌で連載を持つ資格は無いのではないか。そんな人間にトーナメントでの勝機など間違っても訪れないのではないか。

「そんなのもアリじゃないですか？　10年計画でいきましょう。却下」

…だそうです。それでは皆様、良いお年を。

【里ちん註】*そ、それが大問題なのでは…？

最後に底釣りについて触れておきたい。締め切りをとうに過ぎたある日（今回はいつもよりえらく早い設定だった。前回で懲りた里ちんの陰謀である）、僕は家族と八景島シーパラダイスへ出かけていた*。そこで見た巨大な水槽。水面から底まで6～7mはあったと思う。これぞまさしく21尺いっぱいの底釣りだが、泳ぎ回る魚達を眺めていた僕は思った。「アタリなんか出っこねぇ…」。では今まで、幻を見ていたのだろうか…。僕は突然、底釣りを再検証してみたくなった**。だが記事にするには時間が足りない。「困った」と思いながら書き始めたら、いつの間にかページが足りなくなってしまったが、これはこれで良しとしておこう***。

【里ちん註】*何やっとんじゃ～！ワレ～！！

最初ッからそれがテーマじゃい、ヴォケ～！！*もー勝手にせぇ！　しかし、来月号からはトコトン書いてもらいますぜぇ？

釣番付

料金表

50名まで	55,000円
51名～ 75名	60,000円
76名～100名	65,000円
101名～125名	70,000円
126名～150名	75,000円
151名～175名	80,000円
176名～200名	85,000円

・仕上がりは黒一色です
・人数は成績表部分のみ数えます

書体見本

1.ぐりへら鮒会
2.ぐりへら鮒会
3.ぐりへら鮒会

・番付をインターネットで公開できます（無料）

お問い合わせご注文はお早めに！

取扱店：柴　舟　03-3613-2727

ウキや小物の銘入れに

転写シール

初回注文黒一色、300銘で8,500円～
2回目以降同じものをご注文の場合は3,500円～

・8書体、8色を御用意しています
・角印も作れます

取扱店：
柴舟（東京都江戸川区）
03-3613-2727
佐伯釣具店（神奈川県川崎市）
044-911-3722
SANSUI川づり館（東京都渋谷区）
03-3499-5025
フィッシング中原（神奈川県川崎市）
044-711-8266
鮒仙人（神奈川県川崎市）
044-287-7470

お問い合わせ、ご注文は各取扱店または下記HPまでどうぞ

office27
あとりえぐり

http://www.office27.com
E-mail:info@office27.com

へら鮒釣りの楽しさを追究し続ける…

No.469 Jan.2005

へら鮒

Monthly fishing magazine herabuna

1

カラー16ページ増

価格据え置きで誌面ますます充実！

40th Anniversary Year

40周年記念特大プレゼント

超豪華賞品が大集合！

管理釣り場割引クーポン券

野田幸手園　椎の木湖　清遊湖　谷和原大沼　隼人大池　上尾園
F.A吉羽園　谷養魚場　将監　柳生F.P　筑波白水湖　泉堰

お待たせしました。関東主要管理釣り場網羅！

感謝を込めて、読者還元号スタート!!

創刊40周年

昭和41年5月4日第3種郵便物認可
第40巻第1号（毎月1回1日発行）

つれるエサづくり一筋
マルキュー

力、秘めた粒。

この粒には、ペレットならではの集魚力がある。

この粒には、この粒ならではのアピール力もある。

この粒は、セットのバラケに加えることで、より強く、より多くのアタリを誘ってくれる。

この粒は、競技会で競り勝つための切り札となる。

この粒は、マルキューのスーパーペレット「粒戦」である。

セットのバラケを強化する、競技用スーパーペレット。

「粒戦」は、セットのバラケに加えて使う粒状ペレット。ペレットならではの集魚力で、寄せる効果が抜群。ペレットの粒が水に溶けずに残り、バラケの中からポロポロと落下して、へらの視覚にアピールします。ガツガツと食ってくるような高活性を誘発し、くわせエサへのアタリを明確に。粒で沈むため、ウワズリを抑えやすく、早いアタリを攻めていけるのもメリットです。

●粒戦（つぶせん）

定価 一000円 本体九五二円

マルキュー株式会社
〒363-8509 埼玉県桶川市赤堀2-4

お問い合わせ 本社・桶川工場：048-728-0909 大阪支店：072-824-0909
四国営業所：0877-44-0909 九州営業所：0942-82-0909
ホームページアドレス http://www.marukyu.com/

釣り場でエサに困ったら
iモード・ホームページ
http://www.marukyu.com/i

雑誌 07907-01
4910079070155
00952